

信 毎 歌 壇

小島 なお選

やまなみに朝霧を巻きかの御手は吾と天とをその前に置く
(千曲市) 中村 美樹
簡潔な三行だけのお悔やみ欄句点が三つ読点一つ
(東御市) 丸山 タロ
三十五日間のこの薬飲み終えし頃の世界を予想して
(坂城町) 春日 武
北風に水たまりまで波立てり就職決まらぬ生徒を
(安曇野市) 細川 恒
思ふ
(上田市) 大久保幸吉
忘れ物工事現場へ引き返す現場監督明日はドック
(上田市) 山越 肇子
米袋去年は持たたという女の75歳の30キロよ
(松本市) 三井 基史
ベストならどりでも良いかと幼子の問う声聞こえ
(東御市) 関 啓
散る紅葉我の体に降りつもれ顔だけだして春を待ち
(松本市) 興 絹枝
「絵馬」みる
(長野市) 西沢 敬子
朝夕に声かけをせしメダカ一尾命終わって又一人
(宮田村) 佐野 悦子
居に
夏服でもくせいの花見る秋の異常気象の恐ろしき
(長野市) 北沢 京子
夢見つつ共にソファーに横になるこれが一人の位置
(宮田村) 佐野 悦子
置の確かさ

選 評

第一首、見えざる存在のおおきな手。地上を箱庭として山々に朝霧を纏わせ、ちいさな私と犬に仰がせる。第二首、ひとりの人生がたった3行に。「。」と「。」に豊かな歳月の区切りが息づく。第三首、

明日にだって世界が変わってしまいそうな時代の危機感のなか、35日後は短くて長い。第四首、ささやかな水たまりさえ騒立つ季節。心という果てない水面はひとりを思っただけ揺らぎやまない。

米川 千嘉子選

「さんみつ」は甘いのか？適度な社会的距離はどれくらいかな？クマより
(松本市) 北田圭一郎
切り口がハートの葡萄を育てしは刺繍がじやうずな女生徒なりき
(飯山市) 市村紀久子
「わあスゴイ」心病む娘が小躍りすローソクさした土鍋のプリン
(長野市) 森 ふうか
習いたての「夜汽車」歌いき級友のお墓の前で小五の春に
(宮田村) 小田切孝子
凶作に彷彿う熊に罪は無き「おやねえなあ」ふるさと歌り
(上田市) 山本 進
三年半看取ったつまの祥月に茶の花はさくさみしく咲けり
(長野市) せきたつお
前掛けに手をふきながらテレビの前「寺尾」と叫んでいた若き母
(長野市) 原田りえ子
「熊出たぞ」防災無線鳴り響く留まる事なき黒影探す
(小川村) 久田 肇
コマドリの動画を上げし会員は元上司なりよき人なりけり
(千曲市) 中村 美樹
歌集作りし友は準備が大事と選ばなかった歌たちへへの悔い
(千曲市) 関 津和子
背伸びして生きてきた日々はいとおしいなりた自分になれぬまでも
(佐久市) 高橋衣里子
六十五歳予防接種の多きヒートンフル・コロナ幼子の「とこ」
(飯山市) 酒井千代美

選 評

第一首、「三密」の「密」を「蜜」に。人間と熊との望ましい距離を探り、それを作るための実効的な対策が求められている。第二首、珍しい葡萄を作り上げる心は美しい刺繍を刺してゆく心に通う

のかも。第三首、娘の喜び以上に作者の喜ぶ心情が思われる。「土鍋のプリン」、実は多くの人の憧れかも。第四首、小5で亡くなった友の悲しさは作者が年を重ねるにしたがって深くなるのだろう。

小池 光選

秋晴れの朝の空気の切れ味は柱目に沿って薪割ることし
(東御市) 竹内 幸彦
あの熊は私でないと云えようか子熊 匹を連れて彷徨う
(上田市) 矢島 美穂
引き潮のごとく猛暑の去りゆきてウイクトール・フランクに諷かに対かふ
(長野市) 近藤 光子
尺八と三味線と琴の演奏をモーツァルトより新鮮にきく
(長野市) 原田りえ子
熊による死者十三人ウクライナ・ロシア戦争十五万人
(小布施町) 市村 肇彦
千丈岳を目に焼きつけて出征せし若者数多帰還果たせず
(駒ヶ根市) 塩沢 春子
母親を亡くせし熊は冬眠の仕方分からず徘徊する
(飯山市) 坂井 寿男
秋晴れの雲一つなき空のもとピストル鳴りて子ら駆け出しぬ
(松本市) 小松 久志
しかと手を握り話して夢さめて闇に亡き娘の面影を追ふ
(小諸市) 篠原 昭枝
くまさんも生きているのと孫は言っただけどわしらも生きなきゃならん
(安曇野市) 林 靖子
おさなごの車内に響く泣き声に我が背に吾子がいな日を思う
(松本市) 川村 聡子
収穫の三個の大きな白菜を並べて我と日溜りの中
(岡谷市) 山岡 はな

選 評

第一首、文字通り比喩の切れ味がすばらしい。柱目に沿って薪を切る。すばりと割れる。爽快だろう。秋晴れの朝の気持ちよさがよく伝わる。第二首、深刻な問題になっている熊の被害。駆除するよ

りないが、胸が痛む。子熊2頭を連れた母熊、あれはわたしではないか。するどい自己省察がある。第三首、フランクの名著「夜と霧」。若き日に読んで感銘を受けた一冊を再び開く。秋の夜長に。